

八尾市文化財調査報告 6
昭和55年度国庫補助事業

八尾南遺跡・東郷遺跡 発掘調査概要



1981. 3

八尾市教育委員会



はしがき

八尾市は河内平野の中央部に位置し、古代より難波と大和を結ぶ交通の要地であります。従って、市域には多数の遺跡が存在し、これらは古代史を解明する上で貴重な手がかりを我々に与えてくれます。ところが近年の急激な開発に伴ない多くの埋蔵文化財は消滅の危機に瀕しており、貴重な遺跡の実態を把握することは早急の課題であります。

八尾市教育委員会では、昭和55年度国庫補助事業として八尾南遺跡他の発掘調査を実施し、今後の開発に対する埋蔵文化財保護のための基礎資料を作成しました。今後ともこれらの調査で得たいくつかの資料をもとにして、埋蔵文化財の保存に万全を期す所存であります。

尚、報告書の刊行に当たり、調査に御協力を頂いた関係者をはじめ市民の方々に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和56年8月

八尾市教育委員会

教育長 坂本正一

—例　　言—

1. 本書は、八尾市教育委員会が、昭和 55 年度国庫補助事業（総額 2,000,000 円、国庫 50 %・府補助 25 %）として計画し、実施した、八尾南遺跡他の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財室、山本昭、米田敏幸が担当し、昭和 55 年 6 月 1 日より、8 月 31 日までの間に実施した。
3. 八尾南遺跡の調査については、米田敏幸が現地にあたり、阪南大学西村公助、神戸大学林三雄、関西大学中野慶太諸氏の御協力を得た。また、東郷遺跡の調査については、文化財室高萩千秋が現地にあたり、黒川富久雄、他補助員諸氏の御協力を頂いた。
4. 調査に際しては、実測図、写真をはじめ、スライドなどの記録をとった。ひろく利用されることを希望したい。

—目　　次—

八尾南遺跡範囲確認調査 3

東郷遺跡発掘調査概要 13

八尾南遺跡範囲確認調査

1 調査経過

八尾市域では、最近開発の波が急速に進み、市域における多くの遺跡は、破壊または消滅の危機に瀕している。特に、八尾市南部地域では、地下鉄谷町線の延伸や道路整備等に伴ない、今後とも大規模な開発が予想される。先年、地下鉄谷町線の延伸工事に伴ない、八尾南遺跡調査会によって調査された八尾南遺跡は、古墳時代の集落址などを主体とする縄文時代～鎌倉時代までの複合遺跡であり、貴重な遺構、遺物の発見が相次いだ。

八尾市教育委員会では、将来この地域に予想される開発に対応するため、昭和55年度の国庫補助事業として八尾南遺跡の範囲確認調査を実施し、基礎資料の作成を行なうこととした。今年の調査は、遺跡の主要部と想定される地下鉄谷町線操車場用地を中心として、八尾南遺跡の北及び南の範囲を確認することを目的として行なった。調査期間は、6月2日～6月30日で、南側八尾開発事業団用地内に8ヶ所、北側西木の本国有地内1ヶ所に調査区を設定し、トレンチ及びグリットによる発掘調査を実施した。調査区の地番及び調査面積は次のとおりである。

第1調査区	八尾市若林町814-10	50m ²
第2調査区	八尾市若林町896-4	50m ²
第3調査区	八尾市若林町814-4	60m ²
第4調査区	八尾市西木の本4丁目	80m ²

調査方法は、調査区の盛土を機械掘削、旧耕土以下は手掘りによる調査を行ない、写真及び記録の作成を行なった。

この他、八尾市丹北太田20番地でも遺構確認のための試掘調査を行なったので、第5調査区として、本報告に所収した。

2 八尾南遺跡の位置と環境

八尾南遺跡は、八尾市木ノ本から若林町に亘る縄文時代から鎌倉時代にわたる集落遺跡である。ここは、南より延びる羽曳野丘陵の終端部に位置し、ここより河内低平地が北に亘る。従って、ここは南北に流れる河川流路と、自然堤防状の微高地とが交互に入り混り、こういった微高地を利用しての集落の形成が行なわれていたと推定される。現在、南を流れる大和川が羽曳野丘陵との間に横たわるが、かっては南に位置する藤井寺市や松原市域の遺跡群とも密接なかかわりをもち、西方の長原や瓜破遺跡とも、有機的なつながりがあることは確実で、中河内の歴史を考える上で重要な接点に位置する。ところが、ここは八尾市域でも南端に位置し、丹北郡に含まれる地域で、南は松原市に、西は大阪市に接し、現在では八尾市の僻地といわれるほどに中心部よりかけ離れた地域となっている。



八尾南遺跡調査区設定図

そこへ、昭和 48 年より地下鉄谷町線の延伸計画が持ち上がり、昭和 58 年よりそれに伴なう事前発掘調査が、八尾南遺跡調査会によって行なわれた。

それによって、古墳時代の集落・水田・古墳といった貴重な遺構とともに、縄文・弥生・鎌倉の各時代の遺物が検出され、この遺跡の全貌と重要性が明らかとなった。

さて、周辺の遺跡を概観すると、すぐ西に隣接する大阪市長原遺跡では、すでに旧石器時代より人が居住していたことが最近知られるようになっている。縄文時代では、後期の土器が南方にある大和川の河川敷で採集されており、また、長原遺跡でも後期・晩期の遺構や土器の出土をみている。

弥生時代になると、前期に、瓜破・八尾南に集落が出現するが、中期には、八尾南周辺の集落は姿を消し、龜井遺跡が北方に出現する。しかし、後期になると、八尾南・長原にも再び人が住み始め、古墳時代の中期に至るまで、周辺に点々と集落が営まれていたようである。

その後、5世紀後半頃には、長原を中心として、八尾南遺跡の西方の地域に大古墳群が営まれるようになる。また、長原遺跡や八尾南遺跡では、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が多く出土し、この時代にも集落の形成が行なわれていたものと思われる。現在、当遺跡を流れる大和川は、宝永 1 年の改修によって付け替えられたもので、現在でも大和川を挟んで、南と北に若林という村落が存在する。

3 調査の概要

第 1 調査区

若林町 314-10 は、今回の調査の最南端に当り、若林の旧村落の北隣に位置する。第 1 調査区は、三角に造成された土地の東端に、 4×9 m のトレンチを設定し、盛土及び旧耕土を機械堀削の後、それ以下を発掘調査した。

旧耕土は、O P + 12.80 m のレベルで、それ以下 110 cm の層序は、第 1 層乳褐色砂質土、第 2 層乳灰色砂質土、第 3 層暗黃灰色粘砂土、第 4 層黃灰褐色細砂粘土、第 5 層茶黃灰色微砂粘土、第 6 層茶黃灰色粘土、第 7 層青灰色粘土、第 8 層暗灰色粘土に分けられる。

これらのうち、第 1 層及び第 2 層では、瓦器、須恵器、土師器、瓦片を多く検出した。また、第 8 層は、八尾南遺跡地下鉄調査時の古墳時代の包含層に対応するものであろうと考えることができる。また、第 6 層をベースとして切り込み、青灰褐色細砂が堆積する南北方向の河道を検出した。上幅は 5.6 m で、砂層内に遺物は検出できなかったが、弥生時代以前のものであろう。

第 2 調査区

若林町 396-4 に設定した第 2 調査区は、第 1 調査区の北方 200 m にあたり、地下鉄調査地の南 100 m の地点にある。ここでは、 5×10 m のトレンチによる発掘調査を行なった。

調査結果、G L -160 cm の盛土、旧表土を除去すると、以下 120 cm の間は、第 1 層淡黃灰色

砂質粘土、第2層灰褐色砂質粘土、第3層灰色粘土、第4層黃灰色粘土、第5層暗黃褐色粘土、第6層黃灰褐色粘土、第7層淡青灰色粘土、第8層暗灰色粘土、第9層青黃灰色粘土といった層序となる。このうち、第4層は、第5層の東側が落ち込んでいる部分に堆積している。また、トレンチ中央付近では、第4層を切り込んで茶黃灰褐色細砂が堆積する幅60cm、深さ80cmの南北方向の小溝を検出できた。遺物は、第8層に土師器片、第4層では、弥生式土器の底部が出土した。

第8調査区

若林町814-4に設定した調査区は、第2トレンチの東方100mに位置し、地下鉄八尾南駅駅舎の南方180mの地点に当る。ここでは、5×10mのトレンチによる調査を実施した。

G Lより170cmの盛土・旧耕土を除去すると、以下70cmの間の層序は、第1層灰色砂質土、第2層灰褐色砂質粘土、第3層黄褐色砂質土、第4層淡黄灰色粘土、第5層黄灰褐色粘土、第6層淡青灰色粘土、第7層暗青灰色粘土となる。遺構は、第3層上面において検出した。この面は、南側が高く、北へゆるやかな傾斜をもつ。この遺構には、古墳時代の溝、土塁、ピット群及び中世の小溝などがある。古墳時代の遺構は、黒褐色の粘土を堆積土としており、中世の遺構は灰褐色砂粘土が堆積する。

〈土塁〉 長径140cm、短径100cmの楕円型の平面形を呈する。深さは25cmを測り、土塁埋土からは、庄内式甕の破片(1)が出土している。

〈ピット群〉 調査区内において20個程検出した。これらは、径50cmぐらいのものから10cm程度のものまで見られるが、径20~30cmくらいのものが東側を中心に多く見られる。深さは、10~20cm前後であるが、規則的に並ぶものは、調査区内においては検出することができなかった。これらのピット埋土から、土師器片や須恵器片(2)が検出されている。

〈土器埋納ピット〉 調査区東寄り中央付近のピットより、小型器台形土器(3)が完型で出土した。ピットの長径は30cm、短径20cmで、深さは28cmを測る。器台形土器は、皿状に開く受部に、湾曲して拡がる脚台がつくもので、受部内面をハケナデ、受部外面及び脚部内外面をヨコナデによって仕上げる。色調は、乳赤褐色で、精良な胎土をもち、黒斑が受部内面に認められる。

〈溝〉 調査区南中央付近より北西へ延びる幅40cmの小溝である。深さは10cm程で、遺物はほとんど出土しなかった。

〈中世の小溝〉 調査区内を東西に走る小溝で、8条検出した。溝内には、灰褐色砂粘土が堆積する。方向が条里の方向と一致するところから、中世以後の耕作に関連する遺構と思われる。

第4調査区

八尾南遺跡の北限を確認するため、八尾飛行場の北方200mの西木ノ本4丁目に、4×5mのトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査は、現地表より80cmの盛土及び旧表土を除去した後、以下180cmの間、人力による平面及び断面調査を実施した。層序は、第1層の旧耕土以下、第2層淡青灰色砂質粘土、第3層灰褐色粘土、第4層灰褐色粘土、第5層黄褐色砂質土、第6層暗青灰色粘土、

第7層暗灰色粘土、第8層黒色砂質土、第9層乳灰色砂質土層となる。

これらのうち、第4層までは遺物の包含は認められなかったが、第5層、第6層には、土師器、須恵器、墨色土器等の遺物の包含が多数みられた。いずれも細片で、磨耗を受けており、流水による二次堆積であろうと思われる。第7層は、粘質度の高い粘土であり、その上面は、足跡や水田畦畔を伴なう水田造構となっている。水田畦畔は、調査区の北側を東西方向に走るもので、幅60~90cm、高さ15cmを測り、上面に足跡状の凹みが多数みられる。この畦畔は、調査区東付近で区切れており、水口になっていたものと思われる。この水口を中心にして、畦畔の南側に沿って水田面の凹みが認められ、調査区の北東隅には、深さ15cm程の落ち込みがみられる。足跡状の凹みは、暗灰色粘土上面より切り込む、深さ10cm程度の小ピット群で、水田面上に94個、畦畔上に28個の計117個検出できた。これらの中には、第5層にみられる黄褐色の粗砂が堆積する長さ20~25cm程度の長円形のものと、径10cm程度の円形のものがみられる。これらは、いずれも足跡であろうと推定できる。

この水田面の標高は、OP=+9.7mにあり、現地表下180cmである。水田の時期は、水田上層の第5・6層より出土した遺物から平安時代末頃におくことができよう。第7層の水田面より約85cm下の第8層は、古墳時代中期の遺物の包含層である。この層は、深さ5cm程の黒色土層であるが、土師器や須恵器が出土した。

土師器壺(4)は、球形の体部に短かく外反する広口の口縁をつくもので、内面をヘラケズリし、外面上半は縱方向の細かいハケ、下半は横方向の粗いハケ調整を行なう。色調は、淡赤褐色を呈し、胎土に石英、長石粒を含む。

須恵器は、高杯の口縁及び脚部が出土している。

無蓋高杯の口縁部(5)は、ゆるく外反したのち、細くなる端部をもつ。外面に突線が廻り、その下に波状文を施す。

高杯の脚部(6)は、ハの字に開くもので、端部は、外側に平坦面をなし、凸線上の後をつくる。中位には、断面三角の一条の凸線を廻らす。

これらの須恵器の時期は、陶色編年によるI型式1段階ないし2段階に編年できる。地下鉄調査地における古墳時代の集落との間に、何らかの関連が予想される。

第5調査区

八尾市大字丹北太田20番地は、地下鉄調査地の東南500m、第1調査区の東方400mに位置し、八尾南遺跡の一角に当る可能性があり、4×5mのトレンチによる発掘調査を実施した。

sondageは、約100cmの盛土を除去すると、旧耕土となり、以下180cmの間は、第2層淡黃灰色シルト粘土、第3層黃灰色粘土、第4層灰色細砂粘土、第5層淡灰色細砂粘土、第6層暗茶灰色細砂粘土、第7層黃灰色粘土、第8層青灰色粘土となる。

調査の結果、第8層に土師器片の包含が若干みられた他は、顯著な遺構、遺物は検出できなかった。

～八尾市若林町大和川中洲探集の土器について～

ここに紹介する資料は昭和55年7月、地元の大正小学校の学童等によって探集され、八尾市教育委員会文化財室に届けられたものである。八尾南遺跡を考える上での貴重な資料である。

この中洲は、大正橋の下流約1000mのところから明治橋にかけてのびるもので、土器が探集されたのは、この中洲の東側の先端付近であるという。ここは、現在の八尾市若林の旧村に対峙する位置に当る。出土状況は、水流にあらわれた粘土層より発見したということである。遺物は、須恵器壺1点と土師器壺1点で、いずれも完型で保存状況も良好である。

須恵器壺(7) 口縁部は、屈曲して立ち上がり、上方へ外反してのびる。端部付近に凸線を付して段をつくり、端部は外端面に凹面をつくって上へのびる。頸部にも断面三角形の凸線をめぐらせ、上下に波状文を付す。体部は肩がやや張り出し、中位上方に最大径をもつ扁球形を呈する。最大径よりやゝ上方の2本の沈線間に波状文をめぐらす。口縁部及び体部中位に回転ナデ、肩部及び底部に平行叩き目を残す。

土師器壺(8) 口縁部は広口で、屈曲して立ち上がり、短く外反する。端部は丸い。肩部は球形丸底を呈する。体部外面は縦ハケの後、粗い横ハケ、底部はナデで調整する。内面は上半はヘラナデ、下半にはユビナデを行なう。口縁部は、外面が縦ハケの後横ナデ、内面は横ハケナデで調整する。この壺と形態、手法共に同様のものが、八尾南遺跡の地下鉄調査地でも出土しており、やはり、初期須恵器と共に伴している。口径15.8cm、胸径18.0cm、器高18.0cm、色調は淡褐色で、胎土に微砂粒を含む硬質の土師器である。

これらの遺物の発見

場所は、すでに調査されている八尾南遺跡の地下鉄調査地区の古墳時代集落から南へ約600m離れており、ここに新たな集落遺跡の存在を推定することもできる。



大和川土器探集地点

4 まとめ

～八尾南遺跡の概要と範囲～

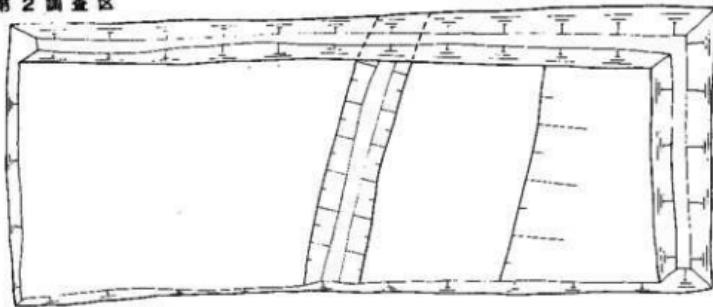
今回の調査では、遺跡の中心部と思われる地下鉄八尾南駅舎・操車場付近（A地点）を中心として、南と北に調査区を設定したわけであるが、特に古墳時代の遺構が、従来考えられていたよりも意外に広い拡張性をもち、南北1000mの範囲に存在することが判明した。つまり、北は八尾市西木の本に設定した第4調査区において、5世紀後半頃の遺物包含層を確認したこと、また、南側では、第8調査区の遺構群や大和川中洲において採集された土器によって、さらに南北に延びている可能性もあり、北は大阪市の長原遺跡に、南は松原市城にまでこれらの遺跡が続いている可能性が考えられる。また、今回古墳時代の遺構・遺物が確認できなかった第1調査区周辺においても、最近の調査で6世紀代の古墳や古墳時代の土塙・ピットを伴なう遺構群が検出された（B地点）。

このようなことから、古墳時代における当遺跡は、南から北へ延びるなどらかな微高地にいくつかの集落や古墳が点々とならんで、極めて広い範囲に点在していた可能性を考えることができる。これら古墳時代の遺構群は、いずれも黄褐色の砂質土をベースにして營まれており、このような自然堤防状の微高地は、当時の人々の居住地として適した場所であったのであろう。

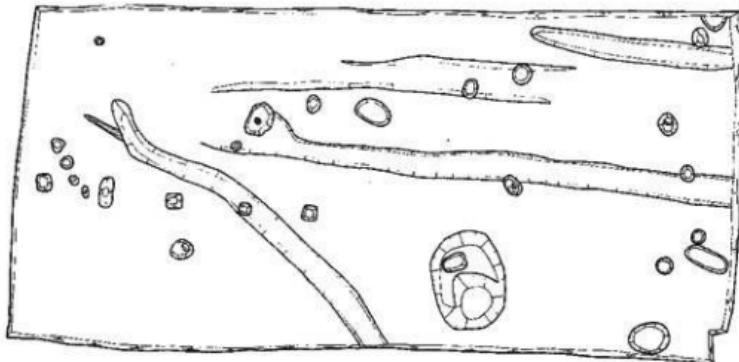
さて、大和川中洲・地下鉄調査地・第3調査区においては、5世紀後半から末頃に属する須恵器・土師器等の遺物が出土したわけであるが、さらに、北東の八尾市南木の本においても、同時期の遺物が多く出土した地点がある。これらは、いずれも古墳時代の集落であった可能性を考えることができる。また、現在中央環状線の通っている長吉長原一帯の地域は、やはり5世紀後半を中心とする長原古墳群が存在している。すると、これら古墳時代の集落は、長原古墳群の東側500～2000mの地点に、南北に並んで所在することが考えられる。この両者の間には、時期的にも位置的にもなんらかの有機的な関連を考え得ることが可能であろう。すなわち、長原・八尾南遺跡では、5世紀後半頃には、中央環状線を中心とする西側は墳墓地域、八尾南遺跡を中心とする東側を居住地域として利用していた可能性すら考えることもできる。今後、両地域における研究の進展が待たれる。

最後に、今回の調査では、縄文・弥生・縄文の各時代の遺構・遺物を検出することはできなかった。しかし、これら各時代の遺構・遺物が付近に存在することは確実であり、今後の調査に期待したい。

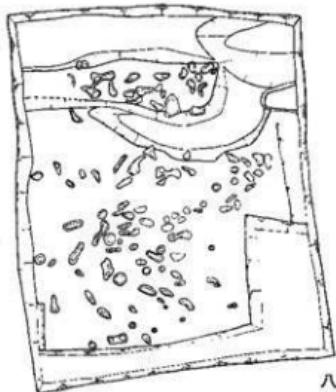
第2調査区



第3調査区

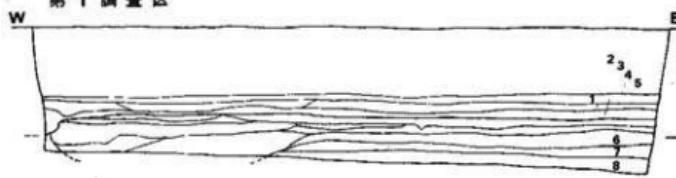


第4調査区

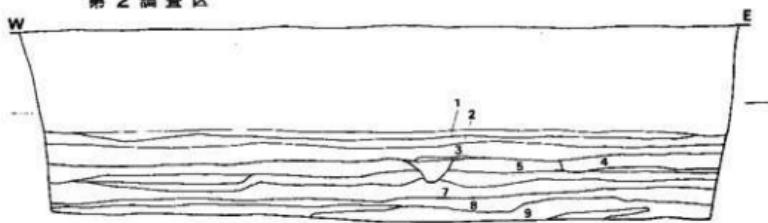


八尾南遺跡調査平面図

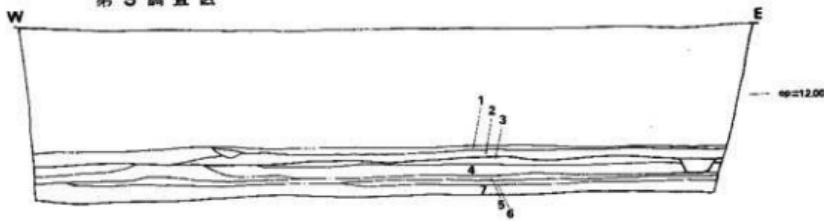
第1調査区



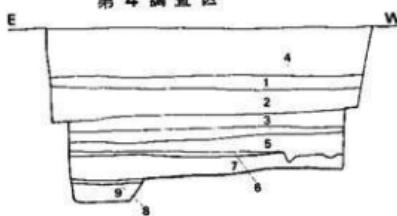
第2調査区



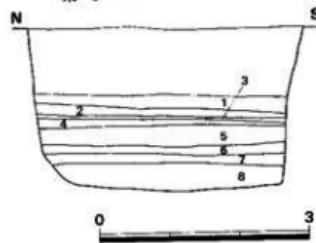
第3調査区



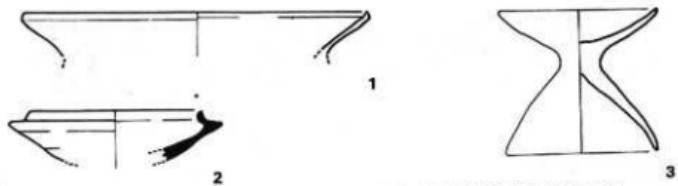
第4調査区



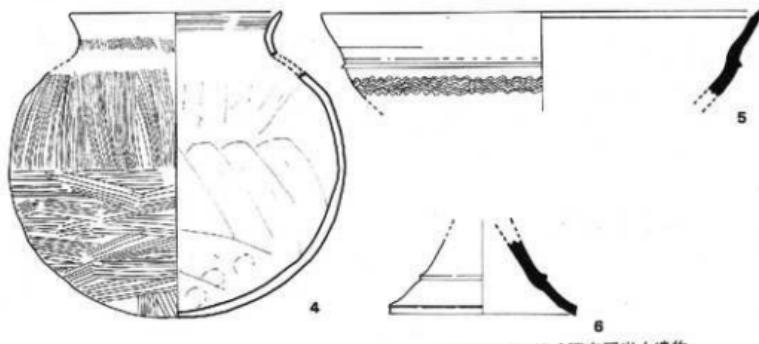
第5調査区



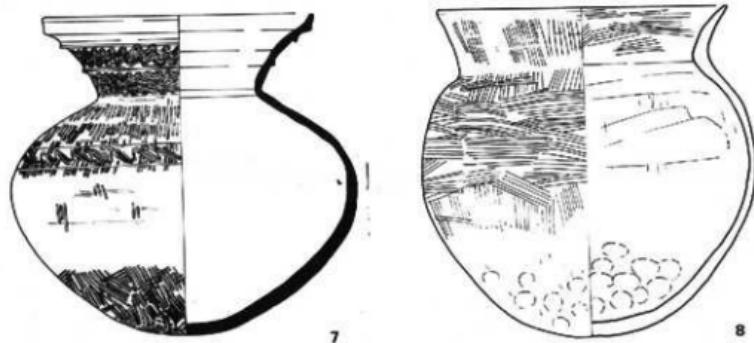
八尾南遺跡調査断面図



八尾南遺跡第3調査区出土遺物



八尾南遺跡 第4調査区出土遺物



大和川中洲採集の遺物



東郷遺跡発掘調査概要

1 東郷遺跡の概要

東郷遺跡は、八尾市東本町、北本町、光町、桜ヶ丘一帯に存在する集落遺跡である。ここでは、昭和46年度東本町2丁目付近の水道管理設工事で墨書き人面土器が出土したことが知られている。それ以後近鉄高架工事、下水工事などで、若干の遺物包含層の存在が確認されている以外、その実態は明らかにされていない。

今回の調査地は、八尾市桜ヶ丘8丁目8-1, 8-9で、調査の期間は、昭和56年1月10日～1月21日である。

2 位置と環境

東郷遺跡は、八尾市の中心部に位置し、古くは河内国若江郡に属する土地で、楠根川と長瀬川に挟まれた冲積地に立地する。同じ冲積地上には、弥生～中世に続く集落遺跡である中田遺跡、小阪合遺跡があり、同時期の遺跡が広範囲に密集する古代から開けた地域である。特に長瀬川、楠根川等の河川は、大和川、石川の豊かな水をこの地域に送り、それらは肥沃な地を造成するとともに、その水運によって、この土地を交通の要衝にしている。このようなことから河内低平地における集落遺跡は、豊かな経済基盤を背景に、古代、中世を経て近世に至るまで絶えることなく発達した跡を留めている。

3 調査の概要

今回の調査は、 $5 \times 5 m$ のグリッドを設定し、試掘を行なったところ、濃密な遺物包含層を検出したので、そのままグリッドの拡張を行ない、本格的な発掘調査に切り換えた。

トレチは $5.5 \times 1.5 m$ で、最終的に一部拡張を行なったので調査面積は約 $82 m^2$ である。調査の方法は遺物包含層の上面まで約 $80 cm$ を機械掘削、以下約 $60 cm$ を手掘りにより調査を行なった。

層位は、地表から遺構面までの深さ $1.6 m$ で西南端部から東へ行くに従って低く、中央部に幅 $5 m$ の南北に亘る落ち込み遺構がある。土層は、城土 $60 \sim 80 cm$ を除去すると、第1層～耕土、第2層～床土、第3層～茶灰褐色土、第4層～暗茶灰褐色土、そして黄灰褐色砂粘土（地山、O.P + 8.50 m を計る）である。このうち第8層、第4層の2層は包含層で、第8層は包含する遺物からみて中世の整地層であり、低地部を整地するために他の高地部から運んで来たものと思われる。なお、地表面で遺構は検出されなかったが古墳時代前期の土内式甕1点が出土した。これより下層は砂層である。

遺構

遺構は、南北に亘る落ち込み遺構を挟み、溝、土塁、井戸等が検出された。

S K 2

長径 110 cm 短径 90 cm 深さ 30 cm で梢円形の土壙である。土層は淡黄灰色土の 1 層で須恵器壙、土師器壙、製塙土器片を出土している、時期は古墳時代中期と考えられる。遺構の性格は明らかでない。

S K 3

幅 180 cm 深さ 40 cm で、西端部（長径）は、調査区域が限定しているので確認出来なかった。土層は割り方の肩に地山（黄灰色砂粘土）を埋め、内部の土層は 2 つに分けられ、上層は淡黄灰色土で、炭化物を含んでおり、ほぼ完型の須恵器环身、高环等を出土した。時期は古墳時代後期と考えられる。遺構の性格は明らかでない。

S D 1

幅 180 cm 深さ 50 cm のほぼ東西に通る溝で、落ち込み遺構によって切られている。土層は灰黄褐色土の 1 層で、遺物は須恵器 环身、环身の完型と土師器、製塙土器等を出土している。

S E 1

井戸は調査区の北西隅で肩の一部を検出、確認のため、その箇所を 2 × 2 m で拡張した。その結果木枠を伴うものであった。直径約 800 cm 深さ 150 cm の土広を掘り、その内側に外径 90 cm 深さ 100 cm の木枠と井戸枠底で東西に並ぶ 2 個の曲物を設置していた。曲物は西側径 88 cm 深さ 10 cm 厚み 0.7 cm の曲物 1 段と東側径 54 cm 深さ 15 cm 厚み 0.9 cm の曲物を 2 ~ 8 段積み重ねたと思われる。その中より 2 個体重なって黒色土器椀が出土した。時期は平安時代前期頃と考えられる。

S B 1

主軸を東西にとれば W - 15° - N を示す、柱間 220 cm の柱 P.1, P.2 を確認したのみであった。柱穴は掘り方径 80 cm のほぼ四角形を呈している。P.2 の柱穴底には小石礎を据えている。時期は、S E 1 と同時期と考えられる。

落ち込み遺構

幅 5 m 深さ 60 cm で南北に掘がる落ち込み遺構で、土層は包含層が落ち込んだ状態で、遺物は、古墳～鎌倉時代の遺物を出土する。遺構の性格は明らかでない。

4 ま と め

今回の調査は、東郷遺跡の東北端部にあたる地点であり、古墳時代～鎌倉時代に至る土塙、井戸、柱、構等を検出した。造構は黄灰色砂粘土の地山面で検出されたが、この地山面は落ち込み造構を挟み東に向ってゆるやかに傾斜している。この地山面は古墳時代の造構面となり、第4層（暗茶灰褐色土）上面は平安時代前期の造構（S E I, S B I）面であろうと考えられるが、造構はその上面で確認できず、古墳時代の地山面まで堀り下げて、柱穴底部、井戸等を検出することができた。その後、鎌倉時代の整地によって埋まったものと考えられる。

これらのことにより古墳時代から鎌倉時代にかけて、順次、集落が形成されたと考えられる。

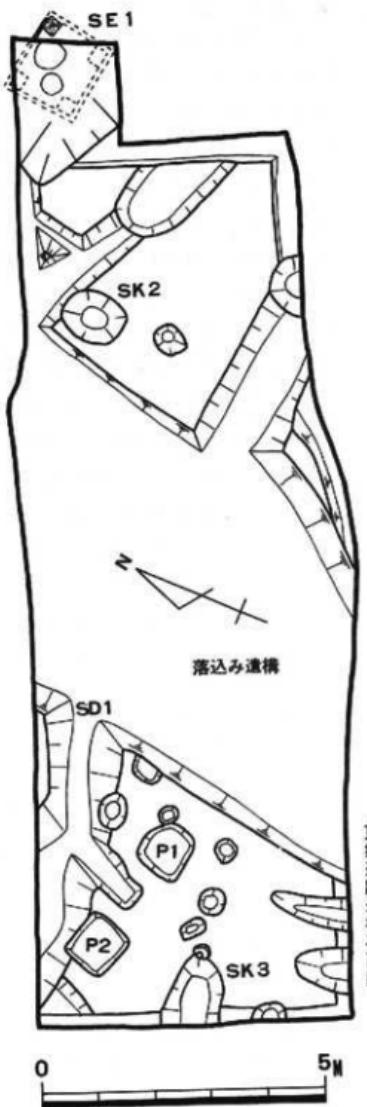
今回、東郷遺跡の発掘調査は予想以上に大きな成果を挙げ得たと思う。そして今後の調査の資料として活用し、東郷遺跡の性格を明らかにしていきたいと考える。



東郷遺跡下層出土遺物



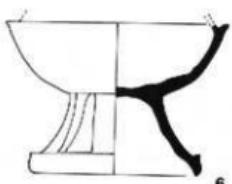
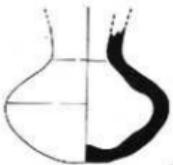
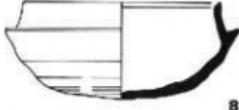
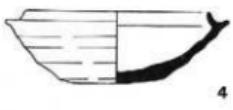
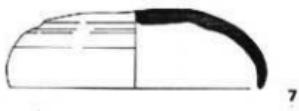
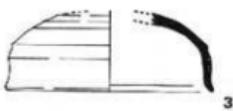
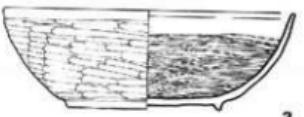
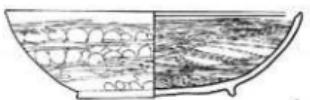
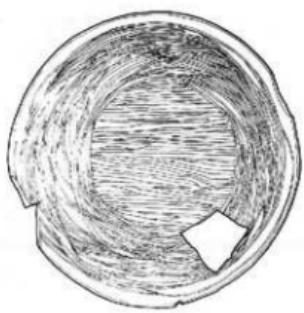
東郷遺跡調査位置図



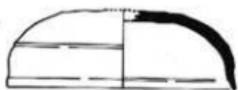
東郷遺跡遺構平面図

実測図 番号	器種	出土 位 置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			内深	外深	高					
1	黒色土器碗	井戸	16.0 (8.6)		4.8	高台のつく平坦な底部より内側しながらのび口縁に至る。端部は内側に段を持つ。内面見込み部は平行ヘラミガキの後ヘラによる不規形踏文を付す。周縁部は輪線状にヘラミガキする。外面は指彫ナデの後相いヘラミガキを行なう。	内面 黒灰色 外面 淡褐色	精良	良好	
2	黒色土器碗	井戸	15.6		5.4	高台のつく平坦な底部より、内側ながら立ち上がる口縁となる。内面見込み部は平行ヘラミガキを行ない、周縁部は輪線状にヘラミガキする。内面は横方向にヘラ削り調整する。	内面 黒灰色 外面 褐色	精良	良好	
3	杯 蓋	上埴 8	11.1		4.8	口縁部は直面に下り、天井部は高く丸い。天井部 $\frac{3}{4}$ 回転ヘラ削り、他は同軸ナゲ調整する。	灰色	やや粗	堅緻	
4	杯 身	上埴 8	10.0	12.1	8.9	たち上がりは内傾し端部は丸い。受部は土外方へのびる。底部は浅く平らである。体部外面は回転ヘラケズリの後ナゲ、下底のみヘラケズリ。	灰色	密	堅緻	自然釉付着
5	帯	土埴 8			8.8	口縁部欠損、端部は土外方へ斜くのびる。体部は球形を呈する。内面回転ナゲ、外面体部下手回転ヘラケズリ、他は同軸ナゲ。	灰色	密	堅緻	
6	高 杯	上埴 8	(9.0)	12		口縁部破損、たち上がりは内傾する。受部は土外方へのび、体部は丸い。脚部は太くならかに外側してひろがり、端部付近で垂直に屈曲する。杯部は内外面とも回転ナゲ、脚部は、外面カキ目、脚部の通しは長方形で三方。	灰色	密	堅緻	
7	杯 蓋	溝2	13.6		4.8	口縁部は内側しながら下外方に下り端部は丸い。天井部は浅く丸い。天井部 $\frac{3}{4}$ 回転ヘラケズリ、他は同軸ナゲ。	灰青 色	やや粗	堅緻	
8	杯 身	溝2	10.6	12.6	5.8	たち上がりはやや内傾ぎみで長く、端部は平坦面を持つ。受部は土外方へのび、体部は丸い。体部 $\frac{3}{4}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナゲ。	淡灰色	密	堅緻	

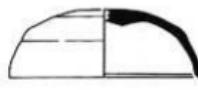
実測図 番号	器種	出土 位置	法 検 (単位 cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成備考
			L	W	H				
9	杯身	溝2	12.4	14.8	4.2	たち上がりは内傾し、端部は尖る。受け部は、上外方へのび、体部は浅く丸い。体部外面 $\frac{2}{3}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	淡灰色 青色	砂粒を含む	堅緻
10	杯身	溝2	14	16.6		たち上がりは内傾して長くのびる。受け部は上外方へのび、体部は浅く丸い。体部外面 $\frac{3}{4}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻
11	杯蓋	溝2	12.3		4.2	口縁部は垂直に下り、端部は内側に段を持つ。天井部は丸味を持つ。大井部と口縁部の間は鋸い模様が見られる。天井部 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻
12	杯蓋	溝2	10.2		8.7	L接部は内側しながら外下方へ下り、端部は内傾する面となる。大井部は丸い。天井部 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻
13	杯身	溝2	18.2	16	4.0	たち上がりは、内傾ぎみで長く、端部は丸い。受部は上外方へのび、体部は浅く丸い。体部外面 $\frac{2}{3}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	灰青色	密	堅緻
14	杯身	溝2	10.6	18		たち上がりは内傾し、端部は尖る。体部は浅い。体部外面 $\frac{2}{3}$ 回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	淡灰色 青色	やや粗	堅緻
15	土師器高杯	溝2	10.6			柱状部より弯曲して開き漏部となる。柱状部外面ヘラナデ、他はユビナデ。	淡茶褐色	精良	良好
16	土師器甕	土甕7	20.0	26.5		口縁部はくの字に屈曲し、上外方へ外反する。端部は面をなす。体部は縱に長く彎曲する。外面は縱方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整の後ユビナデをする。	赤褐色	細砂粒を含む	良好



東郷遺跡出土遺物



11



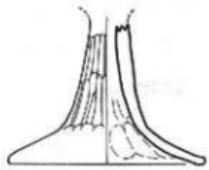
12



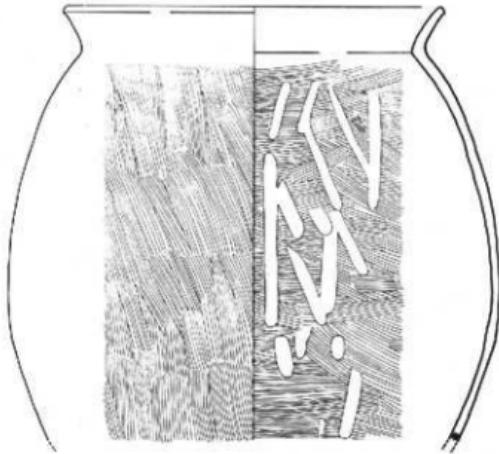
13



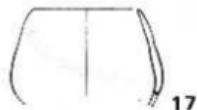
14



15



16



17



18



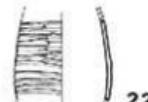
21



19



20



22

東郷遺跡出土遺物



総括

～八尾市における古墳時代後半期の集落とその実態～

今回の報告では、奇しくも古墳時代中期から後期に至る集落址の発掘調査の概要を八尾南遺跡・東郷遺跡について掲載することができた。近年、八尾市域では特にこの時期の遺跡の調査例が増加し、その実態が徐々にではあるが明らかになりつつある。殊に今回報告の八尾南遺跡は、約4万m²に及ぶ地下鉄建設に伴なう木の本地区的調査によりその内容がかなり解明できる他、今回の調査結果も加えて5世紀代の獨立柱建物で構成される集落のあり方として重要な問題点を提起している遺跡である。また、東郷遺跡でも、調査面積が小規模であるにもかかわらず、土広・Pit・溝をはじめとする古墳時代の遺構の存在は、ここが古墳時代中期より後期にかけて営まれた集落の中核部分の一画となっていることを示している。

さて、八尾市域には古墳時代の集落推定地が多数存在するが、これらは市域を縱断して流れる長瀬川・玉串川によって三つの地域に分けることができよう。ここでは、長瀬川左岸以西を西部、長瀬川と玉串川に挟まれた地域を中央部、玉串川以東の山麓地域を東部としてそれぞれの地域に位置する古墳時代後半期の集落遺跡について述べておきたい。

西部・長瀬川左岸地域は南よりのびる羽曳野丘陵の延長上に位置しており、南より北へ傾斜する地形を示す。ここには、南端に位置する八尾南遺跡をはじめとして龜井遺跡・久宝寺遺跡等が所在している。龜井遺跡では5世紀後半頃の小型方形墳が一基単独で検出され、組合せ式の木棺を直葬する主体部が残存していた⁽¹⁾。この龜井遺跡の北方に位置する久宝寺遺跡では、近畿自動車道予定地内の第1次調査で古墳時代の集落遺構を確認しており⁽²⁾、周辺部の管路埋設工事等においても古墳時代中期・後期の遺物の出土をみている。この他、横松南遺跡・横松北遺跡・弓削遺跡等の長瀬川に沿った地域においても古墳時代中期から後期の土師器・須恵器の出土が知られている。最近では、八尾南遺跡の北東に位置する木の本遺跡で5世紀後半の須恵器とともに多數の製塩土器が出土した。

中央部・八尾市二俣で分岐した長瀬川と玉串川は、間に肥沃なデルタ地帯をつくって古代河内湖に注いでいる。この低地帯には、中田遺跡・東弓削遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・山賀遺跡といった数多くの古墳時代集落が存在する。両河川の分岐点の北側に位置する東弓削遺跡では、古墳時代中期末から後期に至る須恵器蓋杯・珠等が遺物包含層及び溝状遺構より出土している。この溝状遺構からは、円筒埴輪・朝顔型埴輪等が検出されており、また、眉や家形埴輪等の形象埴輪の出土も知られている⁽⁴⁾。中田遺跡は、この東弓削遺跡の北方に拡がる集落遺跡である。ここでは、古墳時代中期の須恵器を伴なう時期に建物跡や土広等が検出されており、これらの土広や溝状遺構から初期須恵器とともに多量の製塩土器が出土している⁽⁵⁾。また、中田遺跡の縁辺部においては若干の埴輪片や埴輪円筒棺が出土しており、周辺部に古墳などの埴輪遺構を伴なう大集落であろうと考えられる。

山賀遺跡では、最近の近畿自動車道予定地内の発掘調査で5世紀末頃の小型方形墳が検出されており、帯金具なども出土している。また、周辺には埴輪片が出土する地点がいくらかあり、この付近一帯に一つの古墳群が存在したことが考えられる⁽⁶⁾。これに対し、山賀遺跡の南西には東大阪市友井東遺跡が所在し、古墳時代中期・後期の壇立柱建物の他鉛滓や製塙土器等が出土しており、明確な集落址として位置づけることができよう⁽⁷⁾。

東部・生駒山脈の西麓は、いくつもの扇状地が南北に続いており、この扇状地の上方には高安千塚をはじめとする数多くの古墳群が密集して営まれている。この扇状地の扇端より玉串川にかけての地域に大竹遺跡・水越遺跡・恩智遺跡等の集落推定地が所在するが、この辺りの遺跡については発掘調査例が少なくその実態が明確でない部分も多い。しかし、山麓部の古墳の状況から、さらに多くの集落址の存在を考えることもできよう。

大竹遺跡は、心合寺山古墳や西の山古墳、愛宕塚古墳等の前期から後期に続く大型古墳群に接して営まれた遺跡で、須恵器、土師器を含む遺物包含層が存し、溝状遺構より古墳時代中期の土師器類が出土している⁽⁸⁾。この大竹遺跡の南方に所在する水越遺跡は、玉造り関係の集落遺跡として知られ⁽⁹⁾、古墳時代中期の小型方形墳等が検出されている。

恩智遺跡は、绳文・弥生時代より連続と続く集落遺跡で、5世紀末頃の須恵器類や製塙土器等の出土をみている。

以上、八尾市域における古墳時代後半期の主要遺跡を概観してきたわけであるが、これらの遺跡を総合的にみて気付いた点を二、三問題点としてあげてみようと思う。

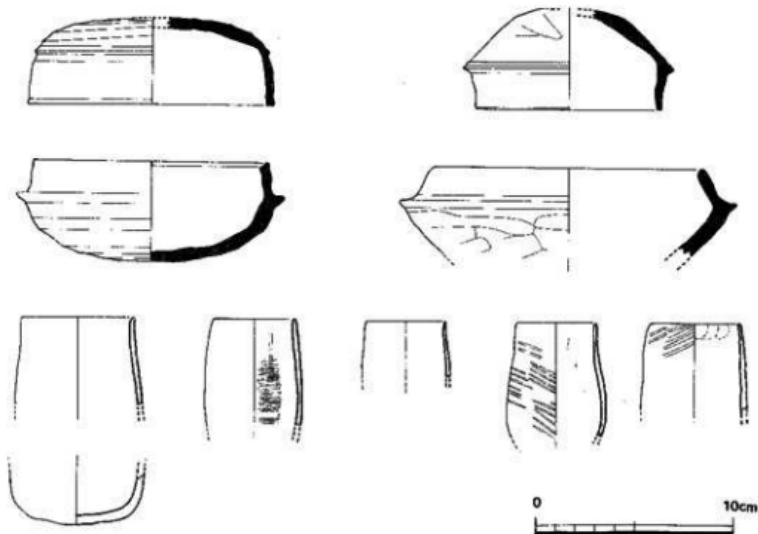
最近の発掘調査の成果で特に注目されるのは、従来集落址が存在すると考えられていた低地部の遺跡に、意外と多くの古墳が存在していることである。これらの古墳の多くは5世紀後半～6世紀初頭の初期須恵器を伴なっており、この時期には、河内低平地においても古墳の築造が盛んに行なわれていたことを示している。つまりこの時期の古墳は、人々の居住した集落と比較的近接した位置に築造されていたのではないかと考えることができる。しかも、これらの古墳で大規模なものは少なく、いずれも一辺10m前後の小型方形墳であるということは、小規模な集落単位でも比較的容易に古墳を築造できたであろうと考えられる。さて、巨視的な目でこれらを眺めてみると、例えばいくつかの集落址の存在を想定できる八尾南遺跡とその墳墓地域としての長原古墳群⁽¹⁰⁾の存在は、地域集団あるいは地縁的な同族集団を構成する一つの地域としての単位になるのではないかと考える。これと同様の視点で他の遺跡をみてみると、古墳群の存在が想定できる山賀遺跡に対して集落址としての友井東遺跡、埴輪の出土する東弓削遺跡に対し中田遺跡の集落址といったようないくつかの遺跡の対応関係を想定することも可能ではないかと考える。

次に、八尾南遺跡、東郷遺跡、木の本遺跡、恩智遺跡、及び東大阪市友井東遺跡では、古墳時代中期後半～末の須恵器に伴ない、製塙土器の出土が目につく。海岸より離れた同内陸部の古墳時代集

落遺跡には、必ずといってよいほど製塩土器が出土する¹⁰。

これらの土器は、外間に叩き目のあるものとナテ調整をするものが存在し、色調や胎土も様々である。内陸部においては、これらの土器を用いて製塩を行なっていたことは考え難く、沿岸より内陸部への運搬用としてこれらの土器を用いたのかも知れない。しかし、内陸部出土の製塩土器には二次加熱を受けた痕跡のあるものも多數見られ、集落内消費のための再精製をこれらの土器を用いて行なった可能性は充分に考えられる。このように、製塩土器出土の内陸部遺跡は確実に塩を消費する集落であったといえるし、換言すれば、製塩土器を出土することがそこを集落とすることができるかどうかの決め手となるであろう。

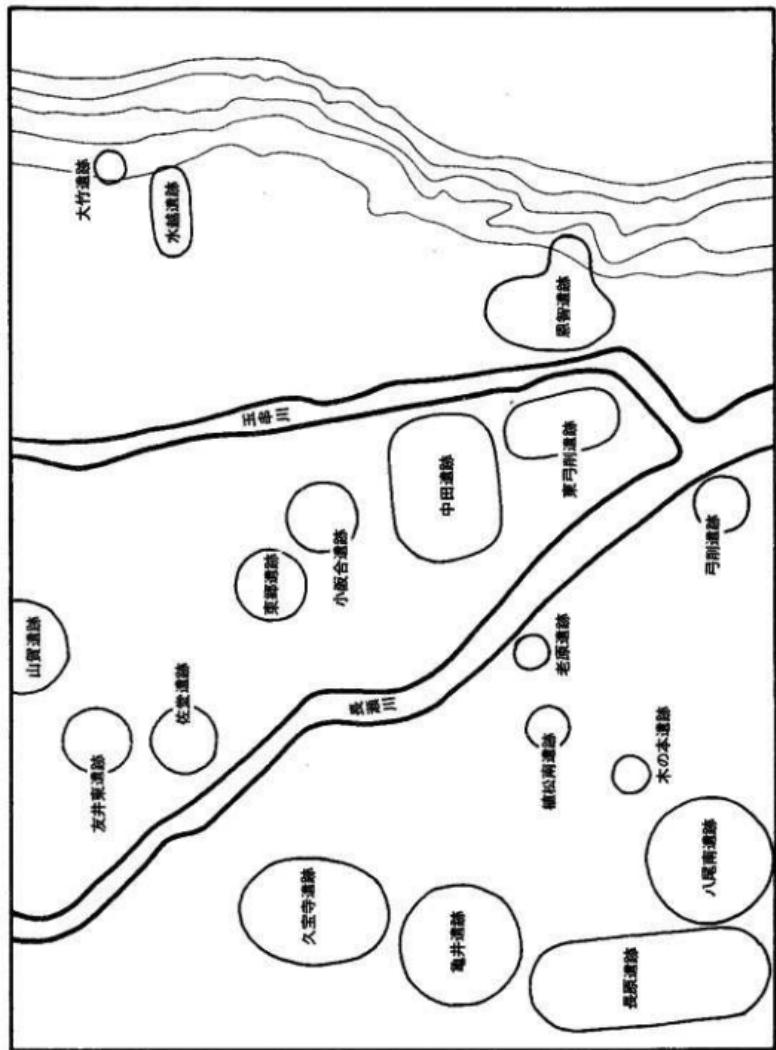
最後に、八尾市域における古墳時代の集落の実態は、ほとんど判っていないといつても過言ではなく未発見の遺跡の数もさらに多數にのぼることであろう。特に古墳時代の造構は埋没深度が浅いため、今後とも調査する機会が増加するであろう。それだけに土木工事等によって破壊されていく危険性も大きく、これらの遺跡の実態を把握することが急務であろう。



木の本遺跡出土遺物

参考文献

1. 「長吉ポンプ場築造に伴なう龜井遺跡現地説明会資料」大阪文化財センター 1979
2. 「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂他5遺跡第1次発掘調査報告書」大阪文化財センター 1975
3. 「大阪瓦斯同内ラインガス導管埋設予定地内久宝寺遺跡試掘調査報告書」大阪文化財センター 1975
4. 八尾市文化財調査報告8「東弓削遺跡」八尾市教育委員会 1976
5. 「中田遺跡南区発掘調査概要」中田遺跡調査会 1974
6. 「山賀遺跡現地説明会資料1」大阪文化財センター 1980
7. 「友井東遺跡現地説明会資料」大阪文化財センター 1981
8. 八尾市文化財調査報告書5「大竹遺跡」八尾市教育委員会 1980
「河内大竹遺跡」一八尾市水道局低地区第8配水池送配水管布設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 八尾市教育委員会 1980
9. 「大阪文化誌6号」大阪文化財センター 1976
10. 野島 龍「大阪府下における製塙土器出土遺跡」ヒストリア82号 大阪歴史学会 1979
11. 「長坂」 近畿自動車道建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1978



八尾南遺跡



第1調査区



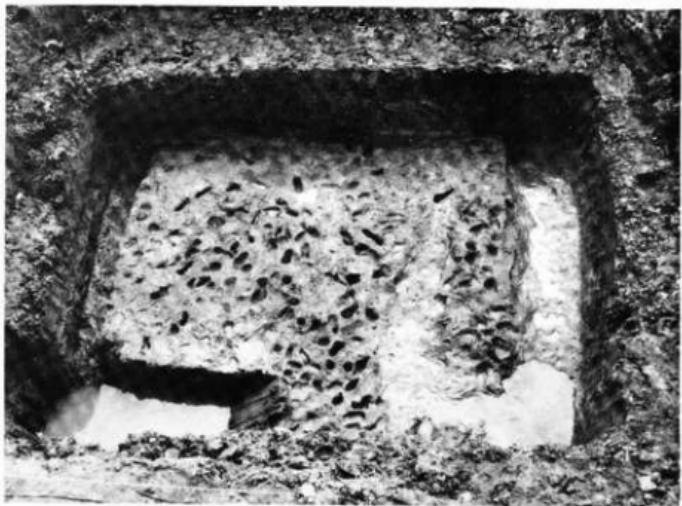
第2調査区

八尾南遺跡

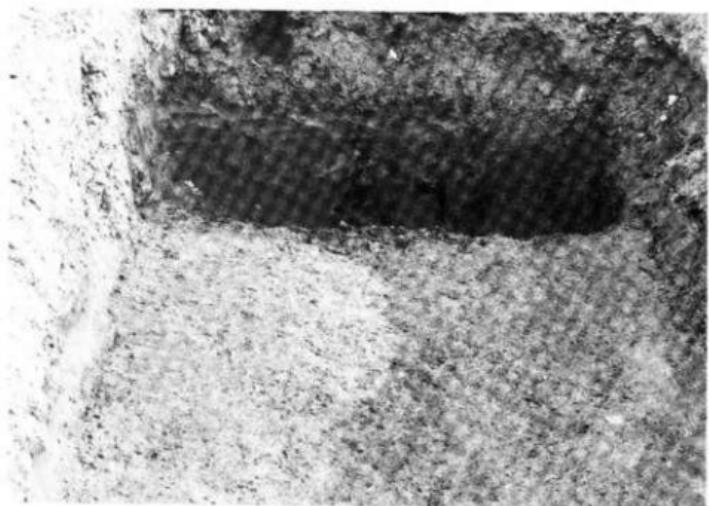


第3調査区

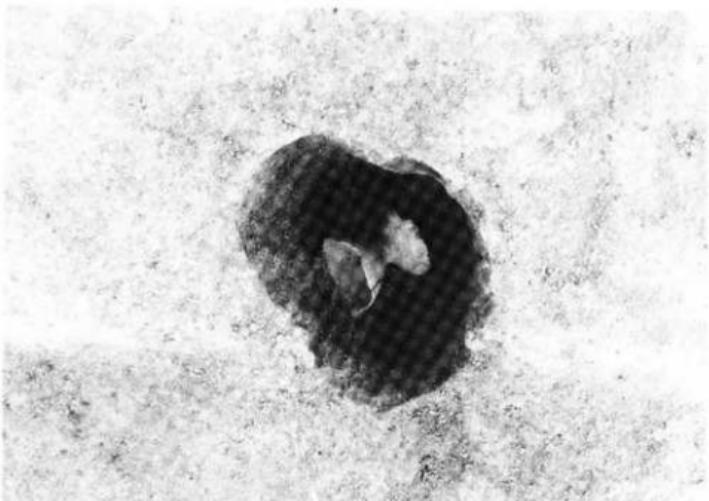
第4調査区



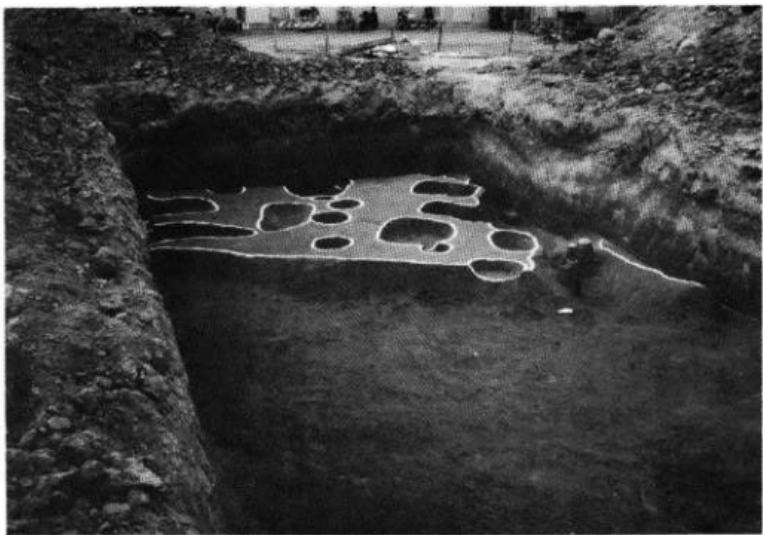
八尾南遺跡



第5調査区



第3調査区土器埋納ビット



東郷遺跡西側遺構



東郷遺跡桜ヶ丘三丁目全景

